版画物語

山田の昔ものがたり（その三）

宿坊と観音さん

文　澤井武志

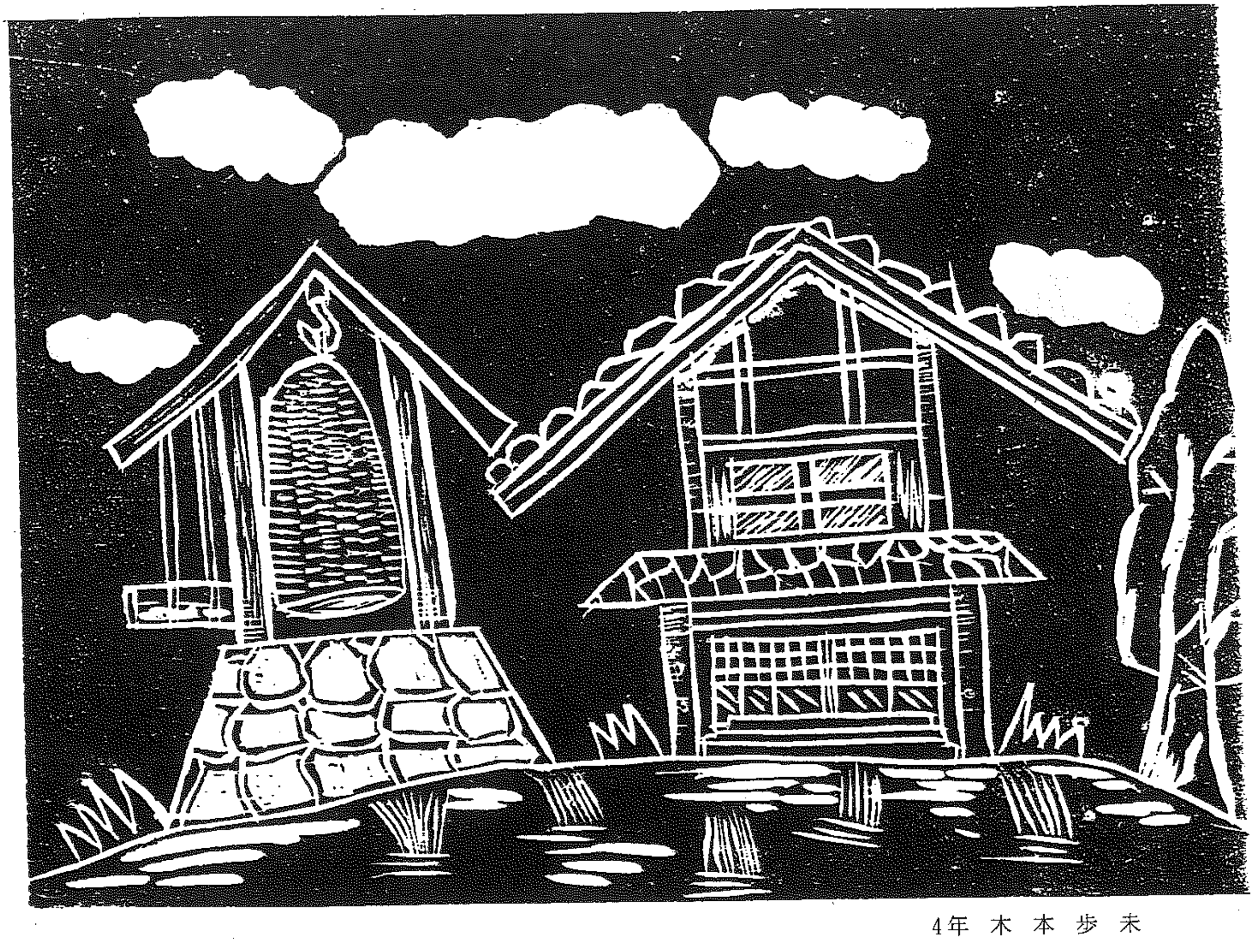
監修　土井敏夫

版画制作　四・五・六年児童

1

山田川のずっと上流に、金剛堂山という山があり、この山の頂上に昔（千三百年ぐらい前に）小さなお寺が建てられました。

そして、越中の国（富山県）の霊山として全国からお坊さんたちが修業をするために、たくさんやってきました。



4年 木本歩未

『ふう。やれやれ。やっと、宿坊までたどりついたわい。』

『うん、そうじゃのう。もう日が暮れてきたことだし、今夜は、この宿坊で泊まっていこうかい。』

『おう。そうしよう。』

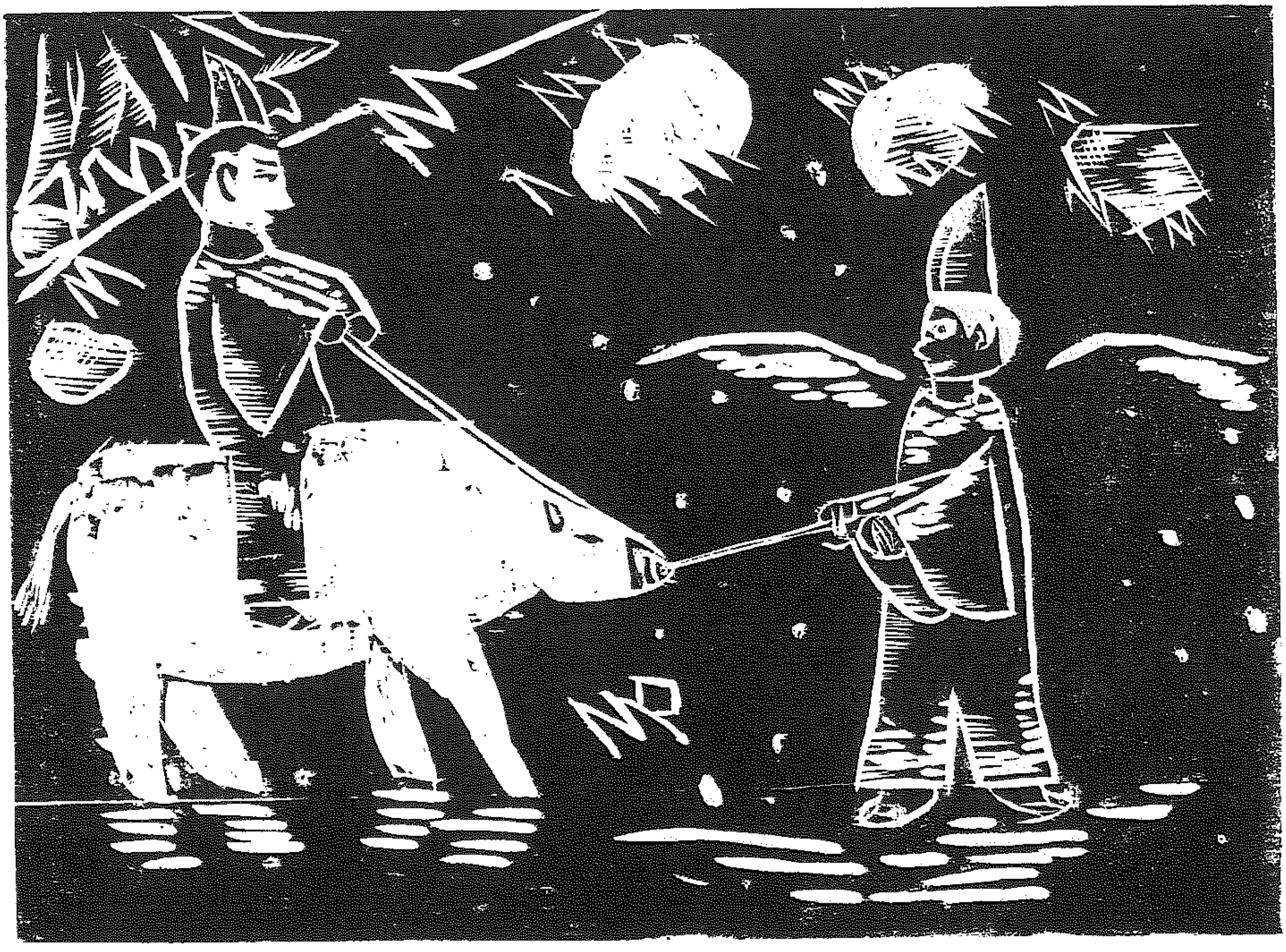
二人のお坊さんは、乗ってきた牛を草むらにつなぎ、坊舎（修業中のお坊さんたちが泊まる小さなお寺）に泊まりました。

（この地に、お坊さんが泊まる坊舎がたくさんあったことから、『宿坊』という名前がついたそうです。）

4年　谷井　　文

次の朝、この二人のお坊さんは、まだ日が明けきらないうちから、出発の準備をし、出かけていきました。

険しい山道に入ると、それまで乗ってきた牛を近くの民家にあずけ、苦労をしながら、金剛堂山に向かって登っていきました。



4年 谷内 厚

『ふう。まだまだかかりそうじゃのう。』
『この分だとあと数日間（すうじつかん）はかかりそうじゃ。なにせ、このあたりの山の中でぐんと高い山の頂上にお寺があるということじゃからのう。』
と二人のお坊さんは、額（ひたい）から流（なが）れ落（お）ちる汗（あせ）をふきふき、話をしながら登っていきました。

5年 若林寛子

そして、苦労に苦労を重ねてやっとの思いで頂上のお寺にたどりついた後、およそ五ヵ月もの間一生懸命修業をしました。

ごまをたいて祈りをずっと捧げたり、滝にうたれて祈ったりしながら、悟りを開くために心の鍛練を続けました。

5年 川村　茜

いよいよ、つらくて長い修業も終わり、お坊さんとして一人前になった二人は、金剛堂山のお寺を出ることにしました。

山道を下り、宿坊の近くまでやってきた時には、あのつらい修業をした金剛堂山がはるか遠くに見えました。

5年 若林哲郎

『つらい修業をお互いによくがんばったものよのう。』

『おう。これから国にもどってもっともっと修業をせねばのう。』

二人のお坊さんは、つらい修業にたえた満足感を味わいながら、遠くに見える金剛堂山をふり返り、烏帽子（山伏したちがかぶっていた帽子）をぬぎ、山に感謝し、一礼をし、宿坊を後にしていきました。

（沢連の南に『烏帽子外し』という地名があり、昔をしのぶことができます。）

6年　谷 川　亜由美

その頃、このようなお坊さんたちに親切に世話をしたり、山道の途中まで案内をしたりしてあげていた仁蔵という男の人が、宿坊に住んでいました。

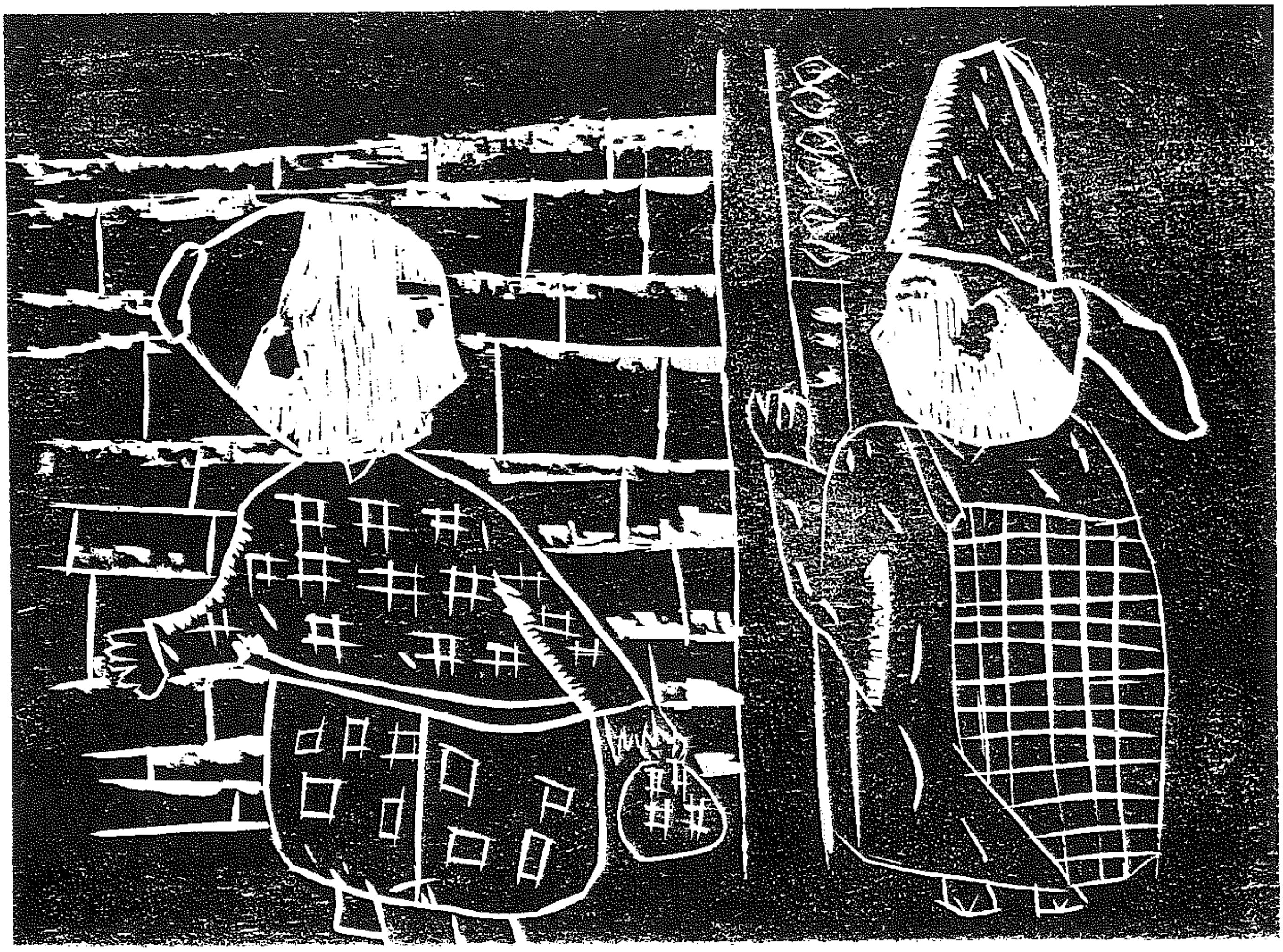
仁蔵は、たいへんな働き者で、心がやさしく、いつも仏様にお参りをしていました。

『仏様、わしの家族をいつまでも健康でいさせてくだされ。村のみんなが幸せに毎日暮らせますように。』

仁蔵は、自分の家族や村人たちの健康や幸せなどを仏様である観世音菩薩に熱心に祈りを捧げていました。

(宿坊の坊舎には、観音菩薩像が二体あり、一つは「十一面観世音菩薩像」もう一つは「聖観世音菩薩像」というものでした。

この二体は共に、大正十五年に国の重要文化財に指定されました。)



6年　中 井　美智代

ある夜のことです。仁蔵は不思議な夢を見ました。なんと、この二体の観世音菩薩様が夢枕に現われ、

『お前は、なんて心のやさしい男であろうか。毎日毎日、家族や村の人々のために、このわたしを拝み、修業に来た坊さんたちに親切にしてくれている。お前の願いをかなえてあげよう。』

仁蔵は、目をさますと飛び起きて、涙を流しながら、観世音菩薩像が置いてある坊舎の方を向き、拝みました。

『ああ、もったいない、もったいない。こんなわしのようなものの願いをかなえてくださるなんて…。ありがたや。』

6年 清 水 優 子

次の日の夢の中にも、また、観世音菩薩様が現れました。

『仁蔵よ。今度は、わたしの願いをきいておくれ。この村の近くに常楽寺という寺がある。そこへ、移してくれないか。わたしはもっともっとたくさんの人々を救ってやりたいのじゃ。』

（常楽寺は、現在の婦中町の森田という所にあるお寺です。）

6年 頼成　恵

次の日もその次の日も観世音菩薩様が現われ、仁蔵にお願いするのでした。仁蔵は、不思議なことがあるものだと思い、村の人々に相談することにしました。

この話を聞いた村の人々は、びっくりし、どうしたらよいものかと集まって話し合いました。そして、仏様のおっしゃる通りに常楽寺にお送りしようと決めました。

5年　野口　昭

いよいよお送りする日には、道に白い布を敷き、村中総出でお送りしました。

『ああ、ありがたい仏様じゃったのう。いつまでもわたしたちの村のことを忘れないでいてくだされ。』

『向こうへ行かれても、わしたちは、いつもお参りにいかせてもらいますからのう。』

村人たちの見送りの後、二体の観世音菩薩像は、常楽寺のそばに建てられたお堂に入れられ、その後もお参りする人が絶えなかったということです。

4年 澤田正輝

山田の昔ものがたり（その三）

「宿坊と観音さん」

平成八年三月一日発行

監修　土井　敏夫

文章・版画指導　澤井　武志　岡崎　優子

川崎　純二

編集協力　堀川　茂　坂森　啓子

岡崎　洋子　高堂　昭則

沼崎　信行　山口　雅美

瀬川　宣子　岡村　元治

古川　一美

発行所　山田村立山田小学校

富山県婦負郡山田村中瀬一〇六

電話（〇七六四）五七－二二五四